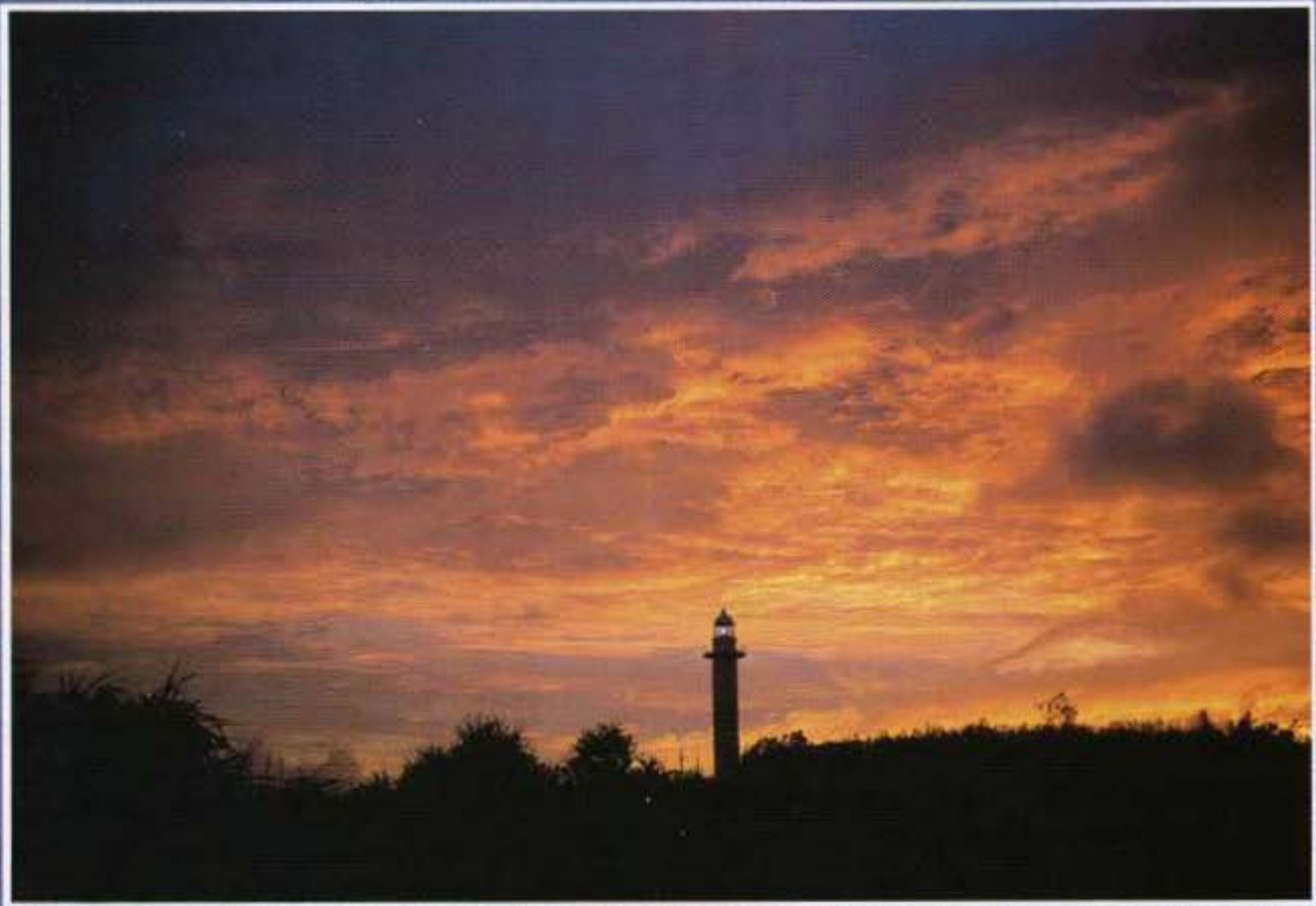


浄

monthly
JODO
1997.9

土



1997
9
September

法然上人讃仰会・発行

日本を楽しくする電話

0088

テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

お申し込み、お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

☎ 0088-82 (無料) または 0120-0088-82 (無料) [受付時間] 9:00~23:00 (年中無休) [インターネットホームページ] <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

法然寺

香川 高松

法然寺

寺院紀行

寺の歴史あり。
僧侶の信仰あり。
目撃者、心の故郷を記憶する。

撮影／タカ才力邦彦



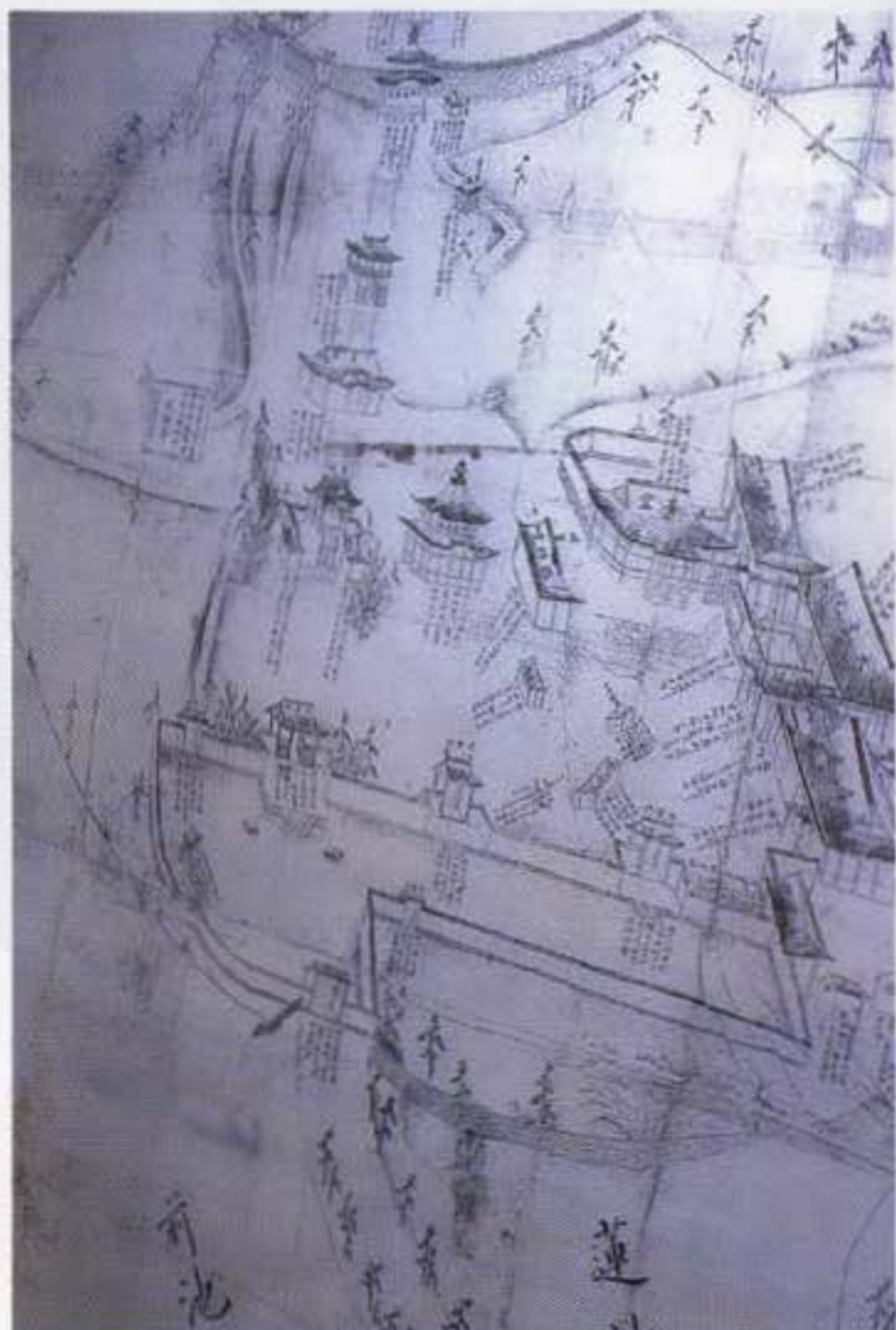
(上)「さぬきの寝釈迦」と有名な釈迦像。涅槃に入る釈迦を見守る様子が再現され、弟子や動物が囲んでいる。また寝釈迦の奥には阿弥陀如来、釈迦如来、弥勒菩薩が並んでいる

(下)松平頼重は晩年出家し、法号を龍雲院殿雄蓮社大誓孤峯源英大居士といった。木像は出家後の頼重像で体内から歯、金毘羅札、光明真言がでてきたという

(上)高松城は日本でも数少ない水城
の一つで、玉藻城ともいわれる
(下)栗林(りつりん)公園は自ら隠
居を願いだした頼重の晩年の住ま
いでもあった



香川高松
法然寺



(上)法然寺本尊の阿弥陀如来立像
 (左)平池わきの雄山(標高八十五メ
 ートル)に作られた法然寺絵図
 (下)法然寺第二十八世細井俊明住職。
 「頼重公は頭の良い方」と、その
 功績を語ってくれた



浄土

1997/9月号 目次

カラーグラビア寺院紀行	写真=タカオカ邦彦	3
もの食う人々をめぐる (前篇)	辺見 庸	8
表紙は語る	岡 克己	15
法然上人をめぐる人々	石丸晶子	16
日常仏教語		25
月影を仰ぐ	伊藤倫雄	26
寺院紀行 香川高松 法然寺	真山 剛	32
御法語に聴く		40
いい加減にしろ		45
うまい野菜と料理の話	我田 大	46
みんな、みんな手塚治虫だった	長谷川 裕	54
俳句雑感	大畑 等	60
事務局便り		68
編集後記		70



表紙題字=浄土門主 中村康隆猓下
表紙撮影=岡 克己
アートディレクション=近藤十四郎

ものの食う人々 を

講演概録(前半)

へんみ よう作家
一九九一年「自動起床装置」で芥川賞
受賞。著作「もの食う人々」は大ベストセラーとなった。

めぐつて

辺見庸

わたしは、年来のテーマとして、人は何故裸の姿を恐れて幻影をまとうんであるのかという事。それからもう一つ、一体僕等は、本当にものが見えているのだろうか、という風なことに非常に興味を持っているわけです。

これは、二十六年間ほど、ジャーナリズムの世界に居まして、果してわたしが見てきたことが、物事の実相なんであろうか、或いは、人というものの実相なんだろうかという風なこととの反省に基づくような、興味じゃないかという風に思っているわけです。

で、そこら辺から具体的なことをちよっとお話ししたいと思うんですけども。

近代この十年ぐらいでメディアの世界、特に映像の世界というものが、大変な拡張をいたしました。我々の生活圏、生活世界というものを大いに変えているのではないかと。我々は最早世界とか森羅万象というものを、メディアというフィルターを通してしか見る事が出来なくなっているのではないかと。しかも、メディア、テレビなどから見た世界を容易に信じるようになってきているのではないかと思っています。

去年の四月に、わたしは新聞の仕事で、麻原彰晃の初公判を傍聴しました。その時初めて彼を至近距離から見たわけです。

彼を法廷で初めて肉眼で見たとき、実は失望しました。わたくしが持っていた麻原に関するイメージは殆ど、悉く覆ひくされたわけです。

それまでわたしを持っていた麻原のイメージは、非常に大きい男であると。非常に首や腕の太い男で、胸板が厚く、いわゆる容貌魁偉なヤツで、その表情の中に、狂気じみた何かがあるに違いない。存在自体が極めて何か猛々まうまうしいものを感じさせる人物であるに違いないと思っていた訳です。

法廷に入って上着を脱いだ麻原は、腕が細く、首も細い、胸板もちよつと痛々しいぐらゐに薄い男でした。

そのときにわたしは、モスクワでレーニンの剝製を見たとき、あるいは、北京で毛沢東の剝製を見たときに感じたのと同じような失望感を感じたように思います。

私共が肉眼で見る世界、至近距離に行つて見る世界と、メディアのフィルターを通した世界というのは、かくも違うんであるかということに驚いたわけです。

私共が伝達していた情報というものは、実は、かなり実像とは異なっているという反省を持たざるを得なかったように、わたくしは思うわけです。

五体投地の視線体験

わたくしは、日本人の記者として、戦後初めてチベットに行つた人間です。七十八年、ちやうど植村さんが行つた直後ぐらいでした。標高四千メートル辺りに在るポタラ宮で、人の宗教的な営みというのは如何に凄惨なことかということを実感したわけです。

けれども、それ以上に感銘を受けましたのは、数百人が一斉に、目指すお寺さんに向かって何キロも尺取虫のように這つて行く、五体投地の姿でした。膝をつき、肘をつき、額をつき、殆ど全員が膝も肘も額も傷つき、血だらけになって、お寺に向かって行く姿に、不可思議な感銘を覚えざるを得ませんでした。

わたしは試みに彼らの真似をして、地面に這いつくばってみました。

そうすると、地面を這っている蟻とか草の表現みたいなものが目にはいるわけです。私共が日頃見ている世界とは違ふ、宇宙の内側のようなものが見えるということを実感し、

人のものの考え方というものは、そういう身体的な行動が変えて行くのではないかと思っただけです。

主としてテレビの映像メディアから受けている世界のイメージというのは、そういう身体的な、行動の変化によって大きく変えることもまた、可能ではないかとわたくしは考えている訳なんです。

実は、話したいことの主要なテーマはその点でありまして、私共は通常この東京あるいは日本というところに暮らして世界を考えているときには、実は、ビニールハウスのような物の中から、透明なビニール皮膚の中から世界を見ているのではないか。そのビニールの皮膚を打ち破って、外の世界に打って出て、そして自分の五感のすべてで世界を感じてみるという行動が、いまは相当必要な時期に来ているんじゃないかと、感じているわけでございます。

サリン事件の現場

もう一つ、冒頭の麻原彰晃に関連して申し上げたいことがあるんですけども。

わたしは、一昨年の三月二十日に、地下鉄サリン事件の現場に遭遇しまして、そのときにも、テレビメディアを通して伝わる世界とは、現場の人の動きは全く別だということを、この目で、見る事が出来ました。

あの三月二十日の早朝に、東京の都心で起きた事件は、まさに阿鼻叫喚でありまして、戦後五十余年の中でも特筆大書すべき、大変な修羅場でもあったという風に伝えられたと思います。

しかし、事件のただなかにいたわたくしとしては、実はまったくそういう印象は持っておりませんでした。それは、何故かと申しますと、わたしは徹夜の仕事から事務所に帰る途中にあの事件に遭遇したわけですが、外国人がジョギングをしていたり、犬を連れて散歩する人達がいたりという、いつもの月曜日の朝の風景の中に、地下鉄の地上出口のところで、女性二人がうずくまっている。誰も声をかけません。わたしも通り過ぎようとしたとき、営団地下鉄の職員が女性客を抱えて、地下から上がって来ました。で、一応わたしも記者の端くれですから、「どうしたんだ」と訊いてみると、非常に面倒臭そうに事も無げに、「いや今日は本当に調子の悪い乗客が多いんですよ」っていうわけです。わたしも集団食中毒かなと思ったわけですが、会社の社会部に一応電話ぐらい入れておこうと思いましたが、公衆電話の在る地下ホームに降りて行きました。

そこで本当に奇妙な光景に出くわしました。

全身が弛緩したような感じで両足を投げ出し、背中を壁にあずけている人達を、まるで線路の枕木でも跨ぐようにして改札口を目指している乗客達の通勤姿。自動改札口を乗り越えて中に入ろうとするわたしに、駅員が「ちゃんとお金払って入ってくれ」と注意するんです。

誰もが、危機的な事態なんて考えていない。殆どが日常的な風景の中に、非日常が点在するという、不思議な、全く不思議な光景でした。そこではみんなが日常的な方を守ろうとしている。十数人が倒れていることは目の端に入って来るけれども、会社に遅れちゃいかん、職務は実行しなければいけないということですね。私も何とお金をいちいち払って、自動改札口の扉を開けて人を助け始めたわけです。

地上出口のところには警察の阻止線が張られておりまして、わたしはその内側から現場を眺めるといふ貴重な経験をしたわけですよ。

救急車よりも先に二十台くらいの報道車両が到着して、雲霞うんかの如く集まった若い記者達、警察の張った阻止線の向こうから携帯電話で記事を送り始めました。わたしも、四半世紀以上記者の仕事をしておりますが、まあ呆れ返ったわけですよ。彼らは現場に来るや否や、一歩も地下鉄の構内に入らずに記事を送り始めるわけですよ。テレビのクルーは、すぐテレビカメラで阿鼻叫喚、修羅場、というようなイメージを伝え始める。わたしが下で見たような光景は全く伝えられないわけですよ。倒れている人達を横目に改札口に急ぐ人々の姿というものを、あの段階で伝えることが出来たら、もっと人間というものの真実を力強く、伝えることが出来たんじゃないかとわたしは、思うわけですよ。

記者生活を通じて多くの事件現場を見てきてわたしが感じることは、人間というのは結局は、慣性の法則に従って従前の方向性でものを考えてしまう、見てしまう。という気がするわけですよ。

救急車が来ていなければ、報道車両で病院に運んでやるというのが、人間として自然なやり方ではないかと思いますが、現場に来たから取材をする、苦しんでいる乗客に対して、「不審者は見なかったか」とか「不審物はなかったか」とか、尋問調で取材をしているわけですね。警察は警察で型どおりの捜査活動をしている。まるで寿司屋の職人が寿司を握るように、みんながその場では職務に忠実なわけですよ。そこには、悪意とか善意もないんです。ただ「慣性の法則」というか、従前の方向性に従って行動している。

「慣性の法則」というのは物理学用語ですが、今日は昨日の続きであり、明日はまた今

日の続きでしかないという凡例主義的行動・思考をそう名づけたいと思います。善意も悪意もない状況、人間の行動のすべてが「慣性の法則」によってなされているのが現状だと思ふわけです。

慣性という語は英語でイナーシャ、ラテン語のイナータが語源です。元々の意味は、自分の力が無い、自動力が無いという形容詞なんです。

わたしは、日本的な「慣性の法則」対外国世界という局面に、いま来ているのではないかという気がするわけです。

わたしは中国に六年おりました。中国は、一応社会主義国を標榜しておりますが、実体は非常に資本主義的です。中国の民衆は個性的といいますが、いいたいことをいいますし、非常に我侔わがままです。あまり「慣性の法則」には支配されてない、物欲色欲の権化のようになっている。むしろ日本の方が非常に緻密な、社会主義的な要素が強いんじゃないかと思ひます。

日本というのは非常に特殊な国でありまして、日本的なイナーシャ、「慣性の法則」というものが、ずうつと流れている。この国においては前例のないことや今までの方向を変えろという事が、如何に難しいか。

つまり大きなイナーシャに支配され、自動力を無くしているのが日本の現状ではないかと、わたしは思ふわけです。

(以下次号)

辺見庸先生のベストセラー「もの食う人々」が角川文庫になっていっそう読みやすくなりました。まだお読みでない方はぜひ書店にてお求め下さい。(編集部)

灯台

撮影●岡 克己

闇を照らす光

闇の夜

漆黒の荒涼たる海に

投げ出され揉まれつづける一隻がある

波の音、船体の軋み

すなわち長い航海の疲労と不安

が頂点に達するとき

遠く、微かに

一条の光が見える

驚愕

わき上がる希望

生かされていることへの歓喜

光は次第に太く強く眩い力となって

船を包み込み

確かな航路へと導く

灯台

長い歳月を越えて

聳え立つ塔

月

かつとしみさき

葛登支岬灯台 (北海道・道南)

1885 (明治18) 年12月5日に初点灯しました。北海道で4番目に古い灯台です。位置／北緯41度44.4分、東経140度36.2分。白色、塔形、コンクリート造り。光り方は、単明暗白光、明6秒暗4秒。光達距離は、18海里 (約33.3km)。高さは15.8m。灯高 (平均水面上から光の中心までの高さ) 46m。撮影日は1997年1月22日の夕方です。



岡克己プロフィール■1948年岡山県倉敷生まれ。風土写真家、中村昭夫氏に師事。『Aqua21』に連載された『水のある風景』が高い評価を得る。灯台はライフ・ワーク。全国120カ所、2000枚に及ぶこれらの作品はCD-ROM『日本の灯台 第一集』(発売/ジェイ・ブレジデント)として好評発売中!!

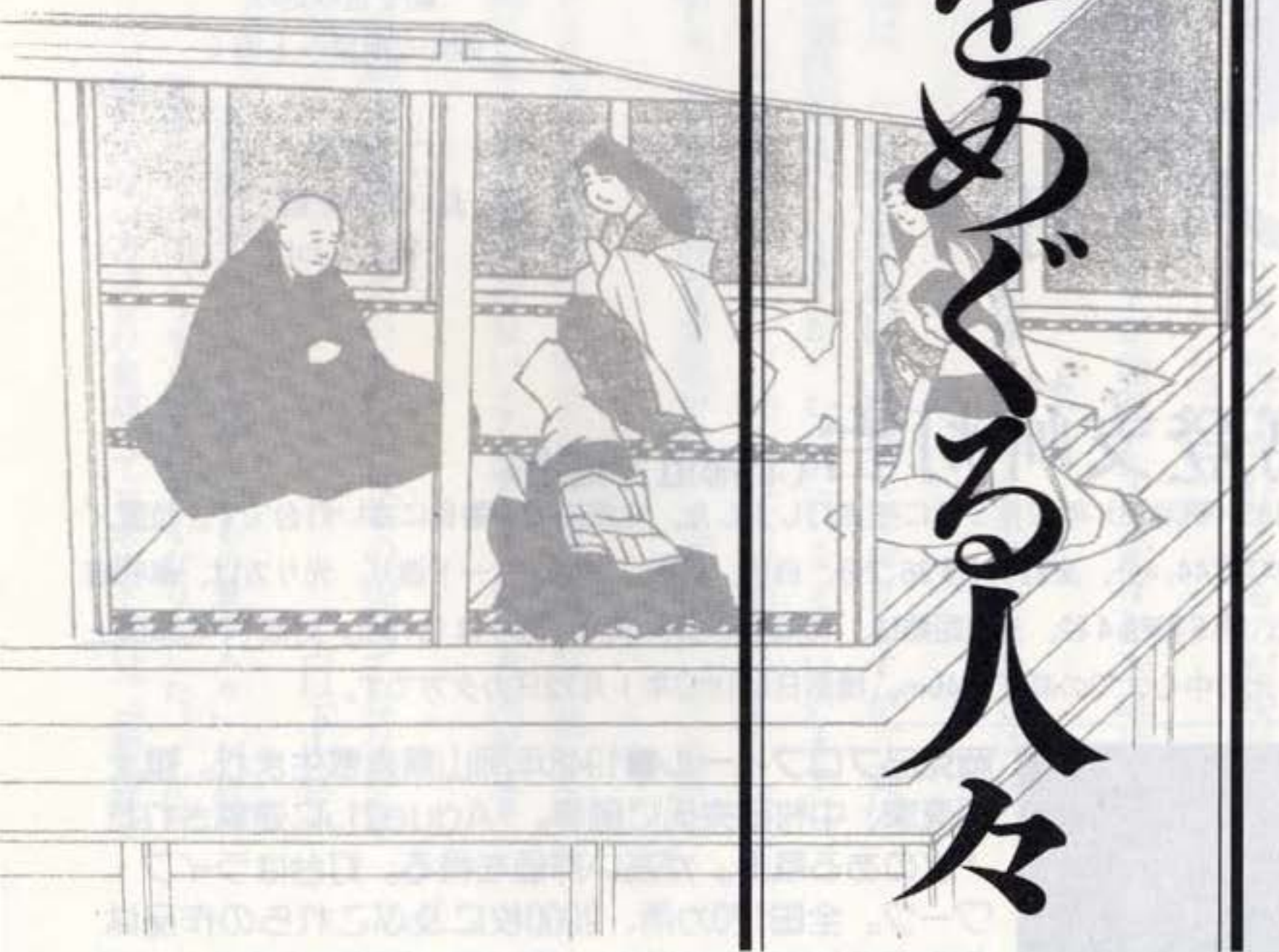
連載小説

法然上人をめぐる人々

【第八回】

神崎の遊女たち

石丸晶子



九

法然と数人の弟子を護送する領送使清原武次の一行は、鳥羽の南門から川船に乗り、淀川を下って行つた。

春のさかりであつた。川べりには菜の花やれんげの畑が打ちつづき、遠く近く満開の桜が望まれた。

一行は声を発する人もなく、聞こえてくるのは川の瀬のせせらぎばかりである。その中を、ときおり、鱸とちと軸へき先で棹をあやつる若い水手かこが、力一杯、たわむ棹を押す掛け声だけが静けさをやぶり、あたりにこだましては消えていった。

兼実の上奏があつたせいであろうか、特に配慮されて、法然の川船には檜皮ひかわの唐屋根がとりつけられていた。

その屋根の下に端座し、念珠をつまぐる法然の胸には、今、さまざまな思いが去来して

いる。

遠い昔のことだ。父を非業の死によつて失つた少年勢至丸は、父の菩提を弔うために、さらにまた天台の教えを学ぶために、叡山を目ざし、この川を遡って京に向かつた。

あの日からすでに六十年が経つ。

この間、まことの道を求めて呻吟しんぎんし、無名の闇にさまよう長い歳月があり、その闇夜のちに、彼は光明に照らされて、ただ一念、みだ仏の本願により縋るといふ新しい道を発見していったのであつた。

そして今、十五歳の勢至丸が上つてきた川を、流人となつて彼は下つてゆく――。

「十五歳のあの日も希望と決意にみちていたが」

と彼は春の日に光る川面をみつめて心に呟いた。「今日のこの門出は、何と、感謝の一念にみたされていることであろう」

さいごは、かすかな呟きとなつた法然のこゝとばを、傍らの弟子が聞きつけた。

「今、何か仰せになりましたか」

「おお」

弟子のことばに、我に返った法然の目に穏やかな微笑の光がさした。

「その昔、十五歳の私は、叡山を目ざしてこの川を遡って京に向かった」

「はい」弟子は答えた。

「実は私も、今、そのことを考えておりました。その日から、全てが始まったのでございますなあ」

「ふむ」法然は深く頷くと、

「ふり返れば、すべての上に弥陀のお導きがあった。であれば、此度のことの上に、弥陀のお導きのないことがどうしてありえよう。

今、それを思っていたのだ」

一人の弟子が声をあげた。

「まこと、仰せの通りでございます。院の御命令を知りましたときは、胸つぶれる思いでございました。しかしあの日以来、明け暮れ師父のお言葉を伺っておりますうちに、われ

らのうちにも、一切を弥陀にゆだねる心が生まれて参りました。ふしぎな心の変化でございます」

水を切る川船におどろいて、白鷺が芦の間から飛び立っていった。

法然は、英知と慈愛のこもる眼差しをその弟子に向けた。

「その心よ。弥陀を信じ、念仏を称えるとは、その心のことよ」

十

その頃、水上交通の比重は大きく、京へ上り下りする道としては、ふつう、淀川の水路が使われていた。川口の町まで、約一日行程であった。

京から西国や紀州方面に赴く場合、川船でまず、淀川川口に近い江口や神崎、加島に出、ここで喫水の浅い小型の川船から、瀬戸内海を航行するための、大型の海船に乗りかえる

のである。

そこで、川口に近いこれらの海船は、船泊ふなどまりの地として栄え、さらに旅人相手の遊女が参集して来て、歓楽の巷としても殷賑いんしんをきわめていた。

遊女たちは旅船が泊とまりに近づくと、小端舟に乗って漕ぎよせ、川波の音にひびかせて鼓を打ち、今様、朗詠を謡い、船客から衣服、絹米などの祝儀をもらうのである。

『栄華物語』によると、彼女たちは長い垂髪すいはつに作眉つくりまゆをし、絹の袴こつちぎに小袿こぎを着て、朝廷の女官ともまがう姿であつた。

岸边には多くの遊女宿が軒をつらね、客を迎かえて酒食が供され、音曲が奏でられ、今様、朗詠が謡われて、一夜の観が尽くされる。淀川の川口から大阪湾にかけての一带は、古来から芦が多数生い茂っていることで名高く、そこで遊女たちは、この生い茂った水辺の芦の間に、小端舟をとどめて、客と枕席を共にすることあつた。

領送使に伴われた法然の一行が、その神崎の、こちらは歓楽街からはいささか遠のいた町はずれの旅宿に、一夜の旅装をといたのはその日も暮れ近い時刻である。

すると、一行がまだ夕餉ゆうげの膳につかぬうちに、鼓の音とともに、今様を謡う女の声が近づいて来た。

仏は常にいませども 現うつならぬぞ あわれなる 人の音せぬ暁に ほのかに夢に見え給ふ

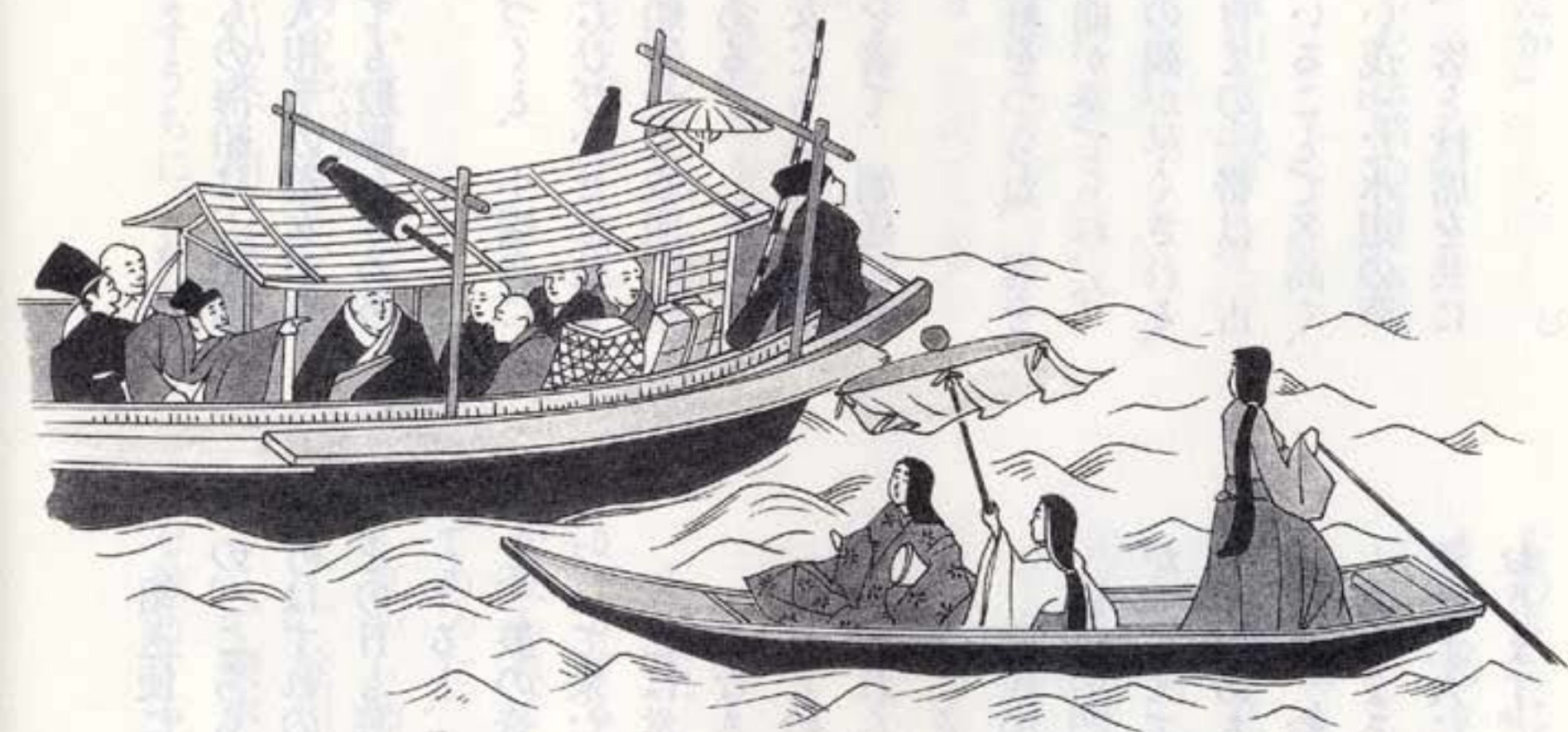
われらは何して 追いぬらむ 思えばいそこそあわれなれ いまは西方極楽の

弥陀の誓いを――

旅宿の門前で歌声は止んだ。案内を乞う声が聞こえてくる。

宿のあるじに呼ばれて戸口に立った清原の従者は、やがて戻ると、

「あこまろと申す遊女が、朋輩とつれ立ち、法然上人にお目通りを願いたい旨、申し出ております。み教えを拝聴したい由でございます



すが、けしからぬことでございます。追い返しましうか」

と言った。

従者の言葉を聞いた武次の心に、沖崎や江口の遊女たちの生涯が想起されて来た。

遊女も一流になれば大したものであつた。幸運に恵まれれば、上皇、公卿の想い女ともなり、皇子や貴族の子弟の母ともなつて、生涯が保証される。

しかし、多くの遊女は年をとつたり病にかかるなどして客がとれなくなると、遊女宿を追われ、末は乞食に身をおとした話も珍しくはない。

法然に対面を求めて来た遊女も、おそらくはそんな身の上からの救いを求めてやつて来たに違いなかつた。

「いや、浮いた心からではあるまい。眞実、道を求めてのことであらう」

と武次は答えた。

「法然さまには夕餉の膳をさし上げよ。その

間、あこまろとやらには、わしがまず会つて話を聞く」武次は従者に命じた。

十一

手に手に鼓や琵琶、笛を携え、緋色の袴をまとつて武次の前に現れたのは、五人の遊女である。

流人を護送中の旅宿に、突然、花が咲いたように現れた女たちを眺めて、何か氣負されそうな心を鎮めると、威厳をとりつくろつて武次は訊ねた。

「お上人は院のお怒りをうけ、京を追われて今、讃岐へ赴かれる途中である。そのお上人に、かかる遊びの風体をしたそなたたちが目通りを願うとは、恐れ多いとは思わぬのか。そもそもいかなる理由があつて、ここに参つたのだ」

武次はことばを切ると、二つ三つ咳払いをしてから、

「遊びに参じたのであれば、ふらちなことじや。お上人は遊びなど、かつてなされたことがないわ」

「申し訳ございませぬ。尊いお上人さまにお目通りを願いますにつけて、我ら五人、もつともよき衣装を見につけて参上致しました。他意があつてのことではございませぬ」

一礼してあこまろは言つた。

「ここに参上いたしました者は、かねてお上人さまのみ教えを伝え聞き、み顔を拝して直接み教えを学ぶことを願つて参りました。どうかお慈悲とお思い下さり、一言なりとみ教えを賜らせてくださいませ」

「それ程に、お上人のみ教えを学びたいか。

なぜじや」

「はい、われらは先の戦乱でみなし児となり、また人買いにさらわれて、遊女宿に売られて参つた者たちでございます。親もなく、家もなく、夫もなく、日ごと、旅の殿方のお相手をする罪深い身にございます」

「いかにものう」

「なれど、お上人さまはかかる遊女の身でも、ただ一念、弥陀に縋るまことの心あれば、成仏できると仰せにございます」

「ふむ」

武次は深く頷いた。

「年老いてのちの、大方の遊女のゆく末のあわれさは、殿もござんじでありましょう。遊女には、現世はもとより、来世にも望みがありませぬ。お上人さまはそんなわれらを、闇から救いあげてくださったのです。何卒、われらに、お上人さまのお顔を拝して、そのみ教えを賜らせてくださいませ」

「よう分かつた」

武次は二度、三度、と頷きながら、

「配所への護送中、例なきことではあるが、はんとき半時ばかり、上人に目通りを許す。み教えをよう聴聞し、心に光明を戴くがよい」

十二

それから一時ほどあとのことである。

あこまろたち五人の女は、昇りてた月の光に照らされながら、淀川の芦の間に小端舟を漕ぎ出していた。

「あねさま」

あたりの静寂をやぶって、一番若い乙前おしまえが呼びかけた。

「お上人さまは、弥陀の御本願にお縋り申せと仰せでございましたなあ、御自身もお縋りして生きて参られたと」

「ほんにのう」

あこまろは月を見上げながら答えた。

「お上人さまからみ教えを拝聴しておりますとき、私は、何ゆえか心が喜びで一杯になりました。あのような幸せな心には、いまだになつたことがありますぬ」ふたたび乙前が言つた。

「私とて同じことよ。今も幸せな思いがこみあげてくるわ」

乙前に眼差しを向けてあこまろが答えた。

「浄土は、われらごとき者のためにあると仰せになりましたなあ」あや菊が言った。

「ただ一心が大切じやと。弥陀仏助け給え、の一念に生きよ、と仰せられた」

棹を漕ぐたけまろが呟く。

「あねさま」

と式部が鱸ともから声をあげた。

「お上人さまのあのお姿。あねさまは弥陀仏を見たとは思われませなんだか。あのお姿は、まこと弥陀の化身であられます。われらも、遊女で生きて二十年。殿方の心も顔も見尽して参りましたが、いまだお上人のごときお方に出会つたことはありませんぬ」

式部の声は川面に消えていった。

棹が水を切る音の外、しんとした静寂があたりを包んでいる。

その静寂の中を乙前が口を切つた。

「あねさま、私の心は今、美しうございます。このまま浄土に参れそう。浄土には、このような心で参るのでありましょう。」

棹をこぐだけまろが、泪を頬につたわらせたまま、頷いて言った。

「乙前、私が考えていたことも、そなたと同じ。このまま、みな一緒に、浄土に参りたいのう。」

「あねさま」

「あねさま」

「あねさま」

あや菊と式部と乙前が、一斉にあこまろに呼びかけた。

「みな一緒に、浄土に参りとうございます。」

朝に夕に、心のそわぬ殿方とたわむれねばならませぬ。もう遊女の暮らしはいやじゃ。今のこの幸せな心をもって、みなで浄土に参りましょうぞ。」

月を仰いでいるあこまろの目に涙が光っている。あこまろもまた、今、心一杯、幸せな

思いにつつまれ、浄土に急ぐ朋輩と同じ心なのであった。

翌朝、法然を護送する領送使の一行は、海船で神崎の泊^{とまり}を出立して行った。

法然も、領送使清原も、海船が通るすぐ傍^{あしま}の芦間に、五人の遊女の衣装が、花のように散っていたことを知らない。あこまろたちの浄土に旅立った遺体が、芦の波間に発見されたのは、その日の午後おそくであつた。

朝日新聞社より、石丸晶子先生の

「蜻蛉日記―現代語訳」が発刊されました。

定価は本体3000円＋税。

副題に「ある女の人生史」とあるようにとても読みやすい内容で好評発売中です。

使用人が主人のことを「旦那様」と呼んだり、妻が自分の夫を「旦那様」と呼んだりします。この「旦那様」も本来「檀那」と書いて、仏教語なのです。

檀那は原語のダーナを音訳したもので、その意味は、与えることの意味で、中国では「布施」という言葉に漢訳されています。つまり檀那＝布施ということになります。しかし中国や日本では、檀那というと、布施をする人施三・仏教の後援者を指す言葉になっています。そして現在

では男性を呼ぶときにのみ使われているようですが、昔は女性を呼ぶときにも使われていた例があり、この檀那という言葉が広く用いられていたことが容易に想像ができます。

布施というと、どうも財物の施しのみを考えてしまいがちですが、仏教では、財施と同等に法施・無畏施を説いています。つまり教えの施しと、相手が畏れおののいている原因を解決し、取り除いてあげる施しです。また、財施の中にも無財の七

旦那

だんな

施を説いています。これは、財物のないときにもできる施しで、具体的に七つをあげています。つまり、財施、和顔施・言辞施・身施・心施・床座施・房舎施です。やさしい視線であり、なごやかな笑顔であり、おもいやりのある言葉であり、手を貸してあげることであり、何もしなくても奥深い心のおもいやりであり、そしてまたは自分の席をゆずることであり、雨やどりのときなどに自分の家の中に入れてあげることであるのです。

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

☎六九五 京都市右京区

西京極郡町一〇三番地三

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五―三一四―七七六八

FAX 〇七五―三一五―三七五三

月影を仰ぐ

伊藤倫雄

称名寺仏教婦人会の七月例会は朝六時半の開始です。毎朝五時半に掃除のお手伝いに来られる方に合わせて、この日の庭掃除も定刻に始めました。六時十五分に梵鐘が鳴ると、六時半から三十分間の勤行。続いて一時間の法話が終わると、茶がゆのお斎(とき)。最近の家庭では「おかゆ」を食べることもほとんどありませんので、意外と好評で、ここ十年ばかり一年のうち七月、八月のみを早朝に、その他の月は夜の例会とし、終了後は茶菓子でしばしのあいだ歓談します。

このようにして天文七年(一五三八)の開山以来、私の住むこの小さな町にも法然上人の教えが説かれ始め、それを受けて阿弥陀如来の本願を信じ、念仏する人々の暮らしが長く続いて今日に及んでいます。いまでも庫裡裏庭にある手水鉢には「元禄七年(一六九四)二月十五日 女中念仏講寄進 玖波村称名寺」という陰刻の文字が鮮やかに読み取れ、

三百余年前の江戸初期におけるこの寺の婦人会の消息を伝えているのです。

最大幅四十七糎、長さ一米二十糎、高さ七十五糎というかなり大きなもので、当時すでにこれを寄進して残すほどの組織力があつたのですから、その講の発足・成立はそれよりもさらに数年、十数年、あるいは数十年をさかのぼることにもなるのでしうか。

「女中」とは、当時の婦人・女子にたいする呼称ですが、朝夕、この手水鉢を見るたびに、この地において念仏の信仰に生きた女性の方々の情熱をしのばせていただいているのです。

昭和三十七年、名称は三百年あまりも続いた「女中念仏講」から「仏教婦人会」に変わりましたが、そのころまでの月例会は長年の慣習に従って毎月旧暦の十五日の夜に行われていました。江戸・明治から大正にかけての電灯のない時代の夜道の寺参りには、満月の

月明かりを必要としたからなのですが、名称の改変を契機に、旧暦とは関係なしに毎月第一日曜日の夜に行うこととなり、それからでもいつしか三十五年が経ちました。

夫婦そろって参詣される方もあり、自宅では毎朝欠かさず勤行をされている方もあり、和やかな家庭生活の輪が広がっています。

いまだに夜の婦人会を続けていることに別段の理由はありませんが、夜空の味わいには捨て難いものがあります。教員生活三十一年、なかでも定時制高校勤務のころは夜空のもと、月光を浴びながら学校と自坊とをどれだけ行き来したかわかりません。都会で仰ぐ月は残念ながら黄色みを帯びて汚れても見えまじょうし、ことに大都會では街灯やビルの灯に消されて、月の影を踏むことさえむずかしくなっていました。幸いにして、瀬戸内海に面したこの地では、一輪の月を求めて空を仰ぎ、海面にたゆとう月の光に思わず感嘆の声

を上げたくなることもしばしばでした。

月影のいたらぬ里は なければども
ながむる人の こゝろにぞすむ

浄土宗の宗歌にもなっているこの歌は、「観無量寿経」の光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨のこころを法然上人が象徴的に詠み表されたものですが、月影のいたらぬ里がないと同様に、阿弥陀如来の光明は遍く十方の世界を照らして障礙するところがありません。しかし、これほどの光も、これを仰ぎ見ることがなければ、肉眼には入らないのです。仏の慈悲心から放たれた攝取の光明も、私たちの心が仏へと向けられ南無阿弥陀仏させられることがなければ、その光明も、ありがたさも感得されることはないのです。

これこそ、まさに仏と凡夫、阿弥陀如来と私たちが一体となって救い、救われる信仰の

世界をじつにわかり易く平易に詠まれた歌ですが、独り静かに暗闇のなかに立って月光を仰ぐとき、そこには一言の説明も解釈もいらないのです。ことに厳寒の月光の白さは、心の奥底まで貫き通すほどの清々しいものがありました。

家並みの続く夜道をお参り下さる方々にも、私と同じような感懷を味わっていただけるのではないかとも思うのです。



ところで、これまで法然上人の教えを受けて生まれた小さな町の一つの寺の婦人会の歴史を述べさせていただきましたが、じつは、昔、高庭（たかにわ・こば）ともいわれた私たちの玖波という町には古代にまでさかのぼる歴史があります。

『万葉集』巻五のなかに、天平三年（七三二）

の夏、都に向かう官吏の供人として肥後国（熊本県）を旅立った十八歳になる一人の青年の

死が記されています。

炎天下の旅は九州からやがて山陽道に入り、さらに長旅が続くうちに、ついに病に陥った青年は、ここ高庭駅（たかにわのうまや）で故郷に残した老親を案じつつ息絶えてしまいました。その悲嘆の様子はマスコミのない当時でさえ、多くの人の涙を誘い、深く胸を打つものがあつたのでしよう。

その悲しい死を知った筑前国守（福岡県・知事）の山上憶良は、その青年の死を悼むとともに、青年になり代わって、臨終の思いを次のように記しています。

伝え聞くところでは、仮に結合して成った人間の身は滅びやすく、水の泡のようにはない命は留めがたいものであるという。だからこそめつたにいない聖人でさえもこの世を去り、いかなる賢者もこの世に留まることがありません。どうして愚かな私ごとき者が死から免れることができましようか。

ただしかし、私の老いた父や母が、ともに私の帰りを待って日を過ぎされることは、そのまま心を傷められることになってしまいました。待ちわびた末に私が帰らねば、きつと目も見えなくなるほどに嘆き悲しまれるにちがひありません。ああ、なんと悲しいことでしょうか、父上。あまりに痛ましいことではありませんか、母上。

私が死出の道に向かうことは辛くはありませんが、ただ両親が、生きてこの世に苦しまれることが悲しいのです。今日、永のお別れをしたなら、いつの世にまたお会いすることができましょうか。

そう嘆いて歌六首を残し、世を去ったというのです。そのなかの一首は

出でて行きし日を数へつつ 今日今日と

吾（あ）を待たすらむ 父母らはも

と詠まれています。

いまから千二百六十年もの昔、奈良の都と九州の太宰府とを結ぶ山陽道は日本でただ一つの大路でした。外国からの使臣も利用するそれぞれの駅には人員が配置され、駅馬が飼育され、瓦葺きの駅舎は当時の地方には珍しく整備された建物であったといわれます。一人の青年の悲嘆の死を伝える高庭の駅も、いまはその跡形もなく、いまだにその所在した場所さえも確定されていないところから、いまなお万葉学者や地方史に親しむ人々のロマンをかきたてているのです。

私も地方史に魅かれている者の一人ですが、私の場合、『万葉集』に載る山上憶良の一文のうち、「まして愚かな者がどうして死から免れることができましょう」という一節、さらに加えて「今日、永のお別れをしたなら、いつの世に、またお会いすることができましょうか」という青年の絶唱の余韻が胸にこたえま

す。

いま、その同じ土地で、同じ空のもとで、
念仏して百人は百人ながら、千人は千人なが
ら救われるとされる選択本願念仏の教えが説
かれ、

露の身はこゝかしこにてきえぬとも

こゝろはおなじ蓮のうてなぞ

と法然上人が詠まれた俱会一处の浄土往生の

信仰が現・当二世を生き抜く人々の心のなか
に静かに、しかし絶えることなく受け伝えら
れ、脈打っているのです。

そして、旅の空に十八歳の生涯を閉じた青
年・大伴熊凝（おおとものくまこり）は、い
まも『万葉』の読者に一つの命の終焉の叫び
を語りつづけているのです。

南無阿弥陀仏

広島県・大竹市・称名寺住職

広島教区教化団長

念珠



■伝承の技と心

念珠の修理・仕立替承ります。

○アクセサリーの修理・加工・
リフォームも承ります。

◆カタログをご請求下さい。
「念珠年報」をお届け致します。



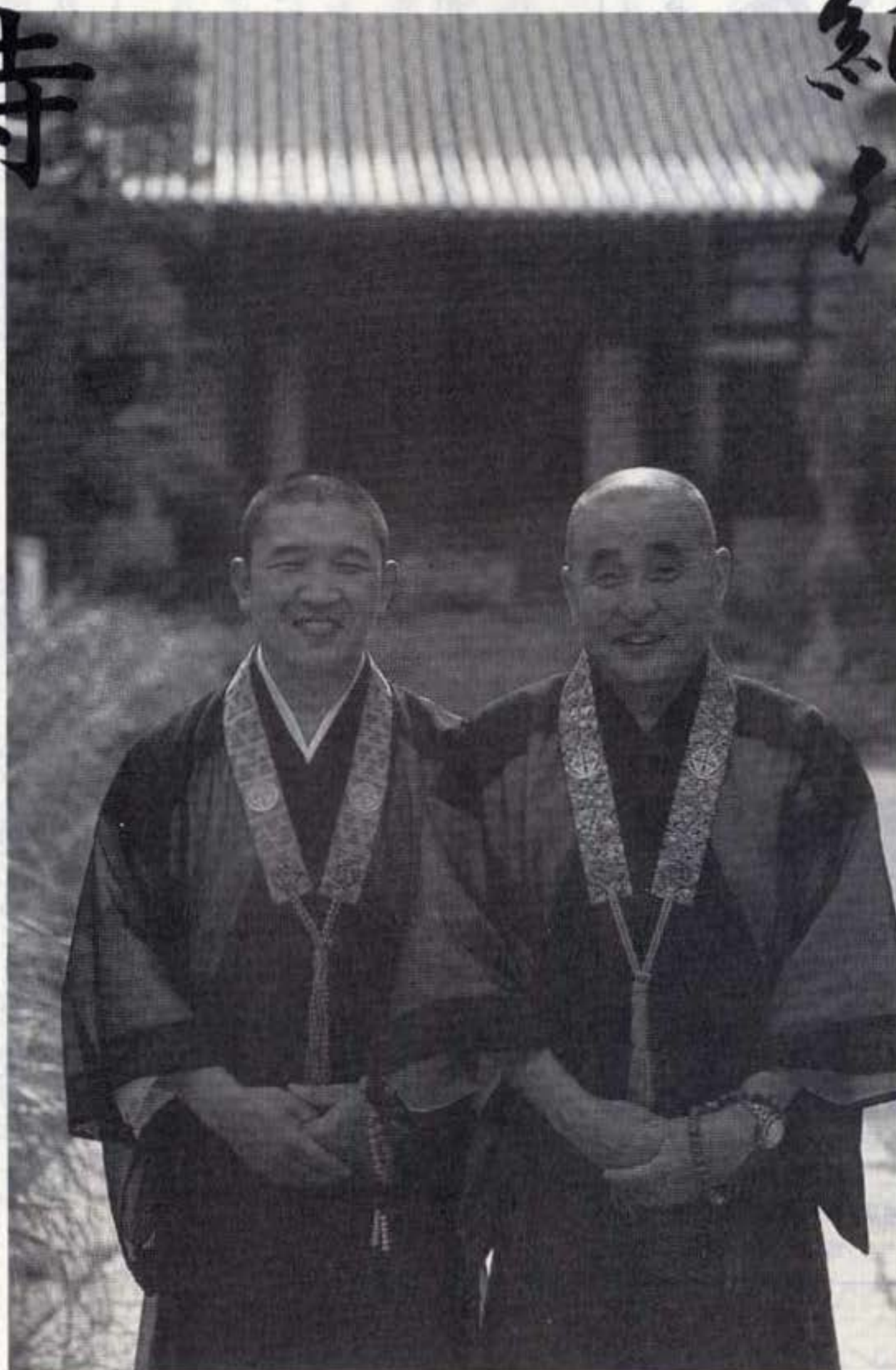
平野屋

本店 東京都文京区湯島4-5-3
☎(03)3811-4450 〒113
四谷店 東京都新宿区四谷2-8
☎(03)3355-2250 〒160

寺院紀行

法然寺

香川高松



撮影／夕力才力邦彦

文／真山剛

法然寺第二十八世細井俊明住職(右)と細井俊道副住職

江戸から明治に移り、それまでの藩は県となった。いわゆる廃藩置県だが、四国讃岐の国は高松藩、丸亀藩がそれぞれ高松県、丸亀県となり、さらに倉敷県の一部と一緒に香川県になった。だがそれもつかの間、一年三か月後には徳島県（当時名東県）と合併された。ところが道路建設の利害をめぐって阿波の国と讃岐の国が分裂、二年六か月で再び香川県に戻った。

しかし十一か月後に今度は愛媛県に合併される。二度目の合併だったが、これも地理的な問題や経済的な問題がくすぶり続き、伊予の国と讃岐の国はやはり分離すべきとの請願が受け入れられ、十二年目に香川県に戻った。

つまり今の香川県は三度目の香川県なのである。

二度も合併された背景はやはり地理的な問題なのであろう。地図を広げると、香川県は確かに小さい。さながら四国の右肩にちょこんと乗っている文鳥、では言い過ぎだが、決して大きくはない。

こうした香川県だが、名所として有名な所は少なくない。金毘羅さま、瀬戸大橋、小豆島、栗林公園、高松城、丸亀城、四国八十八か所の霊場……。そしてもうひとつ、『浄土』の読者なら思い出す事があるに違いない。

そう、浄土宗の祖、法然上人が流されたのがこの香川県である。



法然寺を囲む前池。寺ながら城の役目も果たせる作りになっていた

平安時代、貴族仏教となっていた天台宗、真言宗などの南都北嶺の仏教者たちの念仏圧迫と法然の弟子が起こした事件で、法然上人は土佐へ流刑と決まった。しかし法然上人に帰依する九条兼実の配慮で、土佐からこの香川、讃岐への流刑となったのである。

法然上人は藤井元彦の俗名に戻され、兼実の荘園である小松荘（金毘羅さんのある琴平の東方）の生福寺に蟄居させられた。この生福寺はその後廃寺となったが、それが法然寺という名前で現在の地に生まれ変わったのである。

この仏生山来迎院法然寺は寛文十年（二六七〇）、文武両道に秀で、また神仏にも篤かった名君、初代高松藩主松平頼重公によつて建立された名刹である。四国と言えば弘法大師が生まれたと伝えられる普通寺をはじめ多くの真言宗の寺、また浄土真宗の寺が多い。加えて海路より入ったキリシタンも少なくない。そうした中で浄土宗の教えの二河白道を具現化したのが、この法然寺である。

二河白道とは二つの河、火の河と水の河にはさまれた東西に延びた一本の細い白い道のことで、この道の東の端のお釈迦さまに「さあ、行きなさい」と促され、西の端の阿弥陀さまに、「さあ、おいで」と呼ばれ、その道を渡ることによって浄土宗の信者としての心構えを説くための例えだという。

頂上にある松平家の墓所、般若台に続く階段入り口の仁王門



般若台の門。この般若台の回りは石垣が巡らせてある



この例えのように法然寺参道は両側を池に挟まれた東西に延びた道だ。左右の河はもちろん二河白道のような火や水の河ではない。左にあたる南西側は香川でも主要な溜池の平池（へいけ）と前池、そして右の東北側には蓮池と堀。つまり二河白道にあたる道以外はすべて水で囲まれているわけだ。まるで堀に囲まれた城のようだ。

さて、二河白道の具現化はこれだけではない。正面西側に向かい手前から標高八十五メートルの頂上に向かって、総門（と十王堂）、黒門、仁王門（阿吽像）、唐門（四脚門）、二尊堂（弥陀・釈迦）、文殊楼（鐘楼門）、来迎堂（弥陀三尊・二十五菩薩）、そして頂上の般若堂（と拝殿の般若台）が一直線上に並んでいる。まさに極楽浄土への道をこの世に実現した寺院なのである。

もちろんこの他に本堂、三仏堂、祖師堂、書院や庫裡などがたたずんでいる。建築当初の様子は巻頭カラーの絵図を見れば一目でわかるが、まさに浄土宗の教えを説くための作りだ。

こうした伽藍に加え、大変興味深いのは「仏生山法然寺之事」と題した三十五か条の条目を頼重が定めたことだ。これは再興した法然寺が末長く続くようにという目的での諸法度だが、これがまたこの細かな条文なのである。

寺領の範囲から石高（三百石）の配分の仕方、各々のお堂の賽銭の

般若台への階段の途中にある二尊堂。阿弥陀如来と釈迦如来が並ぶ。左右には、坐禅を組むためのかなり広いスペースもある



般若台中央の松平頼重公の墓。般若台に並ぶ藩主らの墓石が丸いのは、いざの時に転がして敵を威嚇するためと、敵に重ねて持ち運ばれないためだという

受納者、僧侶の宗派ごとの人数、法事の日時、僧侶の一日の仕事、墓所の分け方、墓石などが破損した時の対処の仕方など、それは懇切丁寧なものである。しかもこの条目の最後には総本山知恩院と関東十八檀林の住職の花押（サイン）をもらっている。

開山は法然上人、三世までの住職は総本山や十八檀林の元住職で、いわゆる名義だけを借りた形の寺であるが、つまり一から十まで頼重の手による寺なのである。

実際に副住職に境内を案内いただいたあとに、法然寺第二十八世細井俊明住職にお話しを伺ったが、最初から最後まで頼重という人物の話題になってしまった。話を聞くと、寺の門前には地域の経済発展やいざの時の兵糧になるようにとそうめんを作らせたのも頼重で、それが現在の法然寺の社会福祉施設での生産物につながっていることや、墓地は近くの民に解放し、宗派を問わず墓を建てさせたことなど、とにかく話題には事欠かない。般若台の松平家の墓所の回りには家老などの墓が並び、さらにその回りの山の斜面から平地にかけて、二千の墓があるがそのうち法然寺の檀家はわずか四十軒ほど。他宗の墓だらけで、いまでも各宗派の僧侶が墓所でお経をあげているという。まるでいまだという公園墓地のようである。

この頼重だが、高松藩祖として以後十一代二百二十八年の松平氏

般若台手前にある来迎堂。頼重公の遺体はまずここに安置された



法然像と親鸞像。法然寺では最初から両像が飾られてきたという



治績の基礎を作り、生誕百八十年記念祝典、入封二百年記念祝典、同三百年祝典など、後の藩民から長く敬われた名君で、なかなか興味深い人物なのである。

頼重は徳川家康の孫にあたるが、事情により出生が伏せられ、本来は徳川御三家の一つ水戸藩を継ぐところがこの高松藩に封ぜられた。そしてかわりに水戸藩を継いだのが、頼重の弟である光圀である。光圀も兄同様出生が伏せられたが、世継ぎとして将軍に兄よりはやくお目見えしたことで自分が水戸藩を継いだことに納得がいかず、水戸藩を継いだものの自らの世継ぎを兄の子とした。また兄の頼重も光圀の子を高松藩の藩主として迎え入れている。

このように頼重も光圀も家康の血を引く名君だが、やはり御三家を継いだ光圀、水戸黄門のほうが後世に広く知られることになったが、頼重という人物も勝るとも劣らない人物である。

三十一年間の藩主時代に十四回の参勤交代、天皇即位式への将軍代理での参列、中国、九州の目付役といった公務、藩内では高松城の修築、栗林公園の整備、上水道の整備、溜池の造営など。神仏崇拜では、法然寺の再興、金毘羅権現への大門、阿弥陀堂などの寄進、そして参拝が十八回、白鳥明神の再興、石清尾八幡宮の再興など数え切れない。また和歌にも長じていて、上皇から添削をいただいた



先代が昭和四十年ごろから始めた精神薄弱児の施設、龍雲学園。平成元年に閉園、竜雲あけぼの学園に生まれ変わった

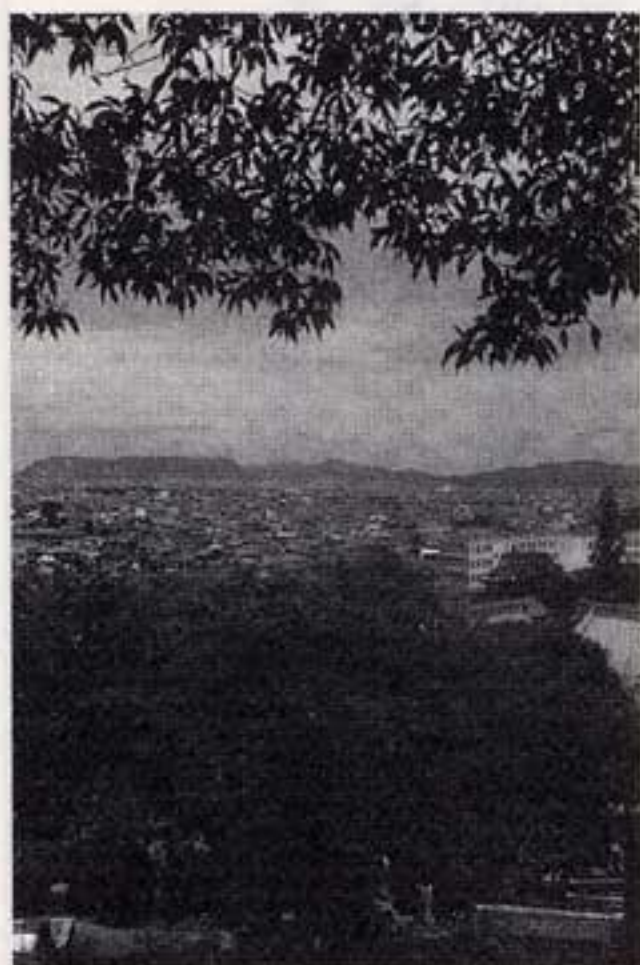
り、歌集も残っている。晩年は將軍への上書献言、藩士への訓戒、家中子供への訓戒、万一の移封への対処などを残し、さらに仏典を聴聞し出家するなど、まさに文武両道、神仏尊宗の人であつた。その頼重は持病のおこりで七十四歳で逝去した。

頼重のこうしたいくつもの功績の中でも、この理想の浄土を具現化した法然寺の再興は当時の宗教観、風土、政治や社会を形にして今に残しているのだから貴重な寺である。法然上人二十五霊場の第二番ということだが、これほど寺を建立した人が見えてくる寺はないだろう。

「香川県人は人間は賢いが思慮がせまく箱庭的でこせこせしている」といい、同時に「元来、さぬきは芸術の国である。讃岐の岐は伎で、技を讃えるという国である」ともいう。こう言われるようになったのはいつの頃からなのか。

前の言葉は三度目の香川県になって以降のことのように、後の言葉は頼重入封の頃からのような気がするが、さて、いつからなのだろうか。

(ルボライター)



般若台から見る屋島。高松城はこの左手にあたる

御法語に聴く

安心というは心づかいのありさまなり。

浄土宗略抄（鎌倉二位の禅尼に進じられし書）

安心というのは、
往生を遂げるための
心づかいのありさまです。

夕陽を眺めよ

夕焼けを見ると、学生時代、インド旅行で目にした光景を想い出す。バスはひたすらデカン高原を走り続けていた。陽も傾き、肌を刺す灼熱の太陽も、情感豊かなオレンジの光となって車窓を染める。勾配がきつくなりバスのスピードが落ちた。外を見やると、車を止めて岩に腰を下ろす恋人たち。暮れゆく夕陽を見つめながら、ふたりは静かにたたずむ。天空に広がる夕焼け、寄り添う二人のシルエット。見ている方さえ幸せな気分にしてしまった。

たかいたかいしてゆうやけがみたいから『子ども俳句歳時記』（蝸牛社）よりという句がある。夕焼けへの憧憬を、親子の絆に重ねた幼児の作だ。父親の温もりを夕陽がつつんでくれる。それが至福の絆であるということ、私たちはいつの頃からか感じ始めている。夕焼けの、あの柔らかな光線につつまれたなら、誰もがいい知れぬ郷愁——原初への回帰願望とでもいえようか——を抱くに違いない。生命の根源に想いを寄せる。夕陽はそんな働きかけをしてくるのだ。

「心づかい」には「対象に対して、心を油断なく働かせること」「心くばり」「細かく気を使うこと」などの意味がある。夕陽の働きかけに^{こた}応えて「心づかい」をする。すると私たちは、生命の根源を想い、この上もなく和やかな心情をもつことができる…。

我ながら、確かにおもしろい言い方だと思う。しかし、現実には夕陽が私たちに働きかけるといってしまふのは、あまりに情緒的で、非科学ではないだろうか。最近までそう考えていた。ところが、そんな躊躇を、ほんの少しだがくつがえす一文に出会った。夕陽を眺めているのは人間だけではないという、動物学者たちの度重なる観察の報告があるのだ。

一頭の若いオスのチンパンジーが、小高い樹に上って枝に座りこみ、遠くの方を眺めだす。やがて空が赤く染まり、川辺林のもの暗い林床にいた観察者の足元まで、夕陽が差し込んだ。最初は何のための行動か計りかねていた観察者であったが、その時になってはじめて、チンパンジーの目的を確信した。

『夕陽を見つめるチンパンジー』（鈴木晃著、丸善）には「沈んでいく太

吉野法

陽を、染まっっていく夕空を眺める」チンパンジーの行動が報告されている。樹上にたたずむチンパンジー。根元に観察者がいると知りながら身動きひとつもせず、いつまでもじっと西の空を眺めているのだ。（このような例は、熊にもあるそうだ）。

チンパンジーたちは明らかに夕陽を見ようと思つて高いところに上り、そばに人間がいようととも気を散らすことなく、黙つて夕陽を見ている。何事にも変え難く、そして去りがたい、至福の時を味わうために、彼らもきつと、夕陽に「心づかい」をしているのだ。

これらの報告を読むにつれ、人間の側に夕陽を好む性質があるとするより、夕陽にはいくつかの生命体と同調する波長があるとでも理解した方が、素人ながら、より正確なのではないかと思う。

『観無量寿経』はご承知のとおり、沈む太陽を心に止めることを、極樂を想う修行「觀察」の第一段階とした。次第に想像力を高めて、ついには極樂世界を目の当たりにしようというのだ。が、そもそも私たちは乱れた心しか持ち合わせていない身。經典は確かに、極樂や仏さまのお姿を事細

うまい野菜と

料理の話⑧



あるいは

セ
ッ
ッ
エ
ー
バ
タ
ケ

自家菜園の

ひそかな

愉しみ

我田大

ヤー雨ばかり降っていてダメだ……。と、いつも天気の話から初めてモーシヤケネー（申し訳ない）。とこれを書いているのは七月一七日なのですが、新潟の山奥のこの辺は七月になってから雨ばかりで、植えてある夏野菜がいつそならない。雨を憎んでみたが、本当の原因は大本のオテント様が照らないのだからと気づいた。植物が光合成作用をできないのだ。したがって太らない。

光合成は大事だよと、学校の理科の時間に言われたような気がするが、それはテストに出るから大事とばかり思っていた。そうじゃなかった。

自分で畠をしてみると照るのと降るのじや、とれるキュウリやサヤインゲンなどの量が大きいだ。

オテント様の力を実感する。エサというか食料を間接的ながらくれているオテント様へのそして植物や野菜への感謝の気持ち、私

にも少しはわいてくる。

自分のなかで栄養を生産できず、とって食うばかりの動物の一種のニンゲンとしては、それないと死んでしまうのだもの。

で、あらためてすべての生き物のもと光合成は、と書こうとしたら内容を忘れていた。辞書を引けば「植物が太陽の光を利用して、炭酸ガスと自らでんぶんを作る働き。」（新解明）

だからというのでもないのですが、野菜作りを始めてから天気のことごく気になる。それは作業の都合もあるからなのですが、それより自分が野菜になったように感じる。雨が降ればよろこび、降り過ぎだと心配し、照りすぎれば雨が少しでも降ってくれと願い、大風は吹かないように祈っている。まあ自分の食料がうまく育つように、都合のいいように願っているといえ、それまでのことなのですが、そればかりじゃない気がする。

うまい野菜と

料理の話⑧



あるいは

セ
ッ
ッ
エ
ー
バ
タ
ケ

自家菜園の

ひそかな

愉しみ

我田大

ヤー雨ばかり降っていてダメだ……。と、いつも天気の話から初めてモーシヤケネー（申し訳ない）。とこれを書いているのは七月一七日なのですが、新潟の山奥のこの辺は七月になってから雨ばかりで、植えてある夏野菜がいつそならない。雨を憎んでみたが、本当の原因は大本のオテント様が照らないのだからと気づいた。植物が光合成作用をできないのだ。したがって太らない。

光合成は大事だよと、学校の理科の時間に言われたような気がするが、それはテストに出るから大事とばかり思っていた。そうじゃなかった。

自分で畠をしてみると照るのと降るのじや、とれるキュウリやサヤインゲンなどの量が大きいだ。

オテント様の力を実感する。エサというか食料を間接的ながらくれているオテント様へのそして植物や野菜への感謝の気持ちだが、私

にも少しはわいてくる。

自分のなかで栄養を生産できず、とって食うばかりの動物の一種のニンゲンとしては、それないと死んでしまうのだもの。

で、あらためてすべての生き物のもと光合成は、と書こうとしたら内容を忘れていた。辞書を引けば「植物が太陽の光を利用して、炭酸ガスと自らでんぷんを作る働き。」（新解明）

だからというのでもないのですが、野菜作りを始めてから天気のことごく気になる。それは作業の都合もあるからなのですが、それより自分が野菜になったようで気になる。雨が降ればよろこび、降り過ぎだと心配し、照りすぎれば雨が少しでも降ってくれと願い、大風は吹かないように祈っている。まあ自分の食料がうまく育つように、都合のいいように願っているといえ、それまでのことなのですが、そればかりじゃない気がする。

いったん根を下ろした場所で一生を終える植物はその環境を変えるわけにはいかず、我慢というか適応して生きていくしかない。

勝手に生えたのではない、自分が植えた栽培植物にはできるだけ良好な環境を与えてやりたい気持ちがある。土にはまだ手をくわえることができるが、天気ばっかしや、どうしようもない。その人為でどうにもならないところで自立して生きている野菜、私などはあまりかまわずに放任しているほうなのですが、にたいして子どもでもない友だちでもないが愛情というか友情というか、なんかいとおしい感情がわいてくるのです。それが植物にとってよい（と人間が思う）天気を期待させるのでしうか。

昨日雨のちよつとの晴れ間に、減反田を借りたナス畑に行ってみれば、ハサク（ウネの間）には水が一〇cmもたまっている。これに備えてウネは広く高くしてあるが、続けば根

が水浸して呼吸困難になり腐ってしまうおそれがある。田んぼというのは耕土の下にバン（盤）があつて水を下に浸透にくくしてあるからノーサラ（猶更）だ。その畠に一步を踏みこめば足がズブズブ。土は水を限度いっぱい含みドロドロになっていた。田んぼにかえっていたといったほうがいい。あー、これはカンマンネー、カンマネエホーガイー（かまうことができない、かまわないほうがいい）。排水できないから、そーつとしておかない、と泣く泣く帰ってきた。晴を祈るばかりだ。

次にハミウリのところに行ってみれば、ポリマルチ（黒や透明のポリエチレンフィルムで畝を覆うこと。雑草よけ、温度湿度保持用など）及びビニールトンネル裾空け（雨ヨケ）をしてあるのに、葉っぱが真っ白になっている。ウドンコ病だ。湿潤の国日本はメロンの適地ではない。そこで無理に作ろうとすれば

米の穂

米の穂

聴いてみる



物理的・化学的に面倒をみて栽培しなければ、なかなかいいものはとれない。例はよくないが、本来は死ぬべきものを機械や薬で病院で生かしておくような栽培法をとらなければだめなのだ。私は、物理的雨だけはするが、化学薬品は使わないから、ハミウリがうまくできるのは五年に一ぺんくらいだ。そういう覚悟はしているが、植えたのがいざじっさい、真っ白にカビの仲間寄生され、やがて枯れていくのを、手をこまねいて見ているのはつらいです。(くやしいのでプリンスメロンと古典的マクワウリも作っています。こっちはさすがに強いです。)

トマトに行く。これもホントは雨が嫌いなのだ。雨ヨケはしないので桃太郎(品種名です)などは最初から避けている。露地栽培用の雨に強い品種を植えている。が、この連続降雨により、葉っぱや茎が水々して、というより水ぶくれして今にも、ギブアップしそう

に見える。赤くなつた実は水を含みすぎて皮がひびわれている。裂果だ、コンチクショウ。完熟までならせておこうとしたところになつぷりぷりの水だからこうなるのだ。

カボチャやキュウリやスイカなども、実がなる以前のツルが伸びない。光合成によるデンプン生産量が不足しているのだ。

えーい、早く梅雨明けしてくれー。

と、だぶだぶぐちよぐちよじめじめじつとりをクドイていたのが嘘みたい。今日は七月二三日。梅雨明けしている。暑くて暑くてたまらない。かんかん、じりじり、もわーんだ。なのにジャガイモの「イモオコシ」(なぜ

「掘り」でなく「起こし」なのかは拙著に書いた)をしなくてはならなかった。この間、原稿を休んで炎天下でそれをしていたのだ。

ほぼ枯れたツルを引き抜き、くつついてきたイモは振って落とす。そのツルはまとめて畠の隅に積んでおく。でまず、手でざっと探

り掘り。次の鍬で傷つけないためだ。だいたいのところで、カンゴローという鍬（刃が三本、柄との角度は九〇度ほど。ほんとは田畑の荒起こし用）でウネ全体をさらう。と、隠れ残っていたのが出てくる。それをおおまかに大小のサイズに分けて袋に入れ軽トラ（ツク）に載せ家にもってくる。暗く風通しのいい地下に数週間広げておく。腐ったのを取り除くためだ。

フタ株ミツ株ならこの作業もたいしたことはないが、私は種芋を一五kgほど植えている。とれたジャガイモ（メークイン、男爵、キタ

アカリ）は量ってはいないが二〇〇kgほどか。ジリジリあっちえ（暑い）炎天下での、腰がヤメル（痛い）汗ダラダラのつらい作業だ。

世間では昔からこういう単純肉体労働はバカがするものだと言われていた。私もイヤだった。だけど板前という職業を選び、徒弟になってみると、どうしても単純反復作業をしなければならなかった。掃除、洗い物、片づけ、魚や野菜の下ごしらえ、もうほとんどそればかり。しかも言いつけられないとすることがわからない。でもその仕事なしには仕事は進んでいかなければ、とくに

古き伝統技

三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

有限
会社

古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)3842-1289
振替00180-2-45231

技術をもたないものがやれるのはそれしかないのだった。料理だけを早くおぼえればいいと思って入ったのだが、思いは先行しても、身体は何もできないのだった。しばらくそれをやってそれを身体が覚え、慣れ、日常行動としてできるようになると、次の新しいことに向かえるようになるのだった。単純作業（な）を身体が自動的にクリアーできるようなことになることは、（その上の）技術が身につくことと似たことだった。頭というか知識で料理を覚えることと、修業で覚えることの一つの差はこの単純作業を苦にしない身体と技術をなかだちにして可能になるのだ……、とかなんとかリクツをこねてみるが炎天下のイモオコシはたいへんつらいです。それでも動作からムダを省き、なるべく疲れないように早く終わるようにダンドリを考えながらやっている。

そのダンドリの一つづつを確実にクリアーしていけば仕事は終わるのだ。誰が見ているわけではないが早く確実に最後まで仕事をしようとするのは、板前修業を一からやつたせいだ。単純作業がヤダヤダ、と思っていれば意識がヤダのほうにむいて、そこから逃げることばかりを考えてしまう苦痛の時間になるのだ。板前をしなければ私は今でも、口では何というかしらないけれど、心の奥底では単純反復作業はバカがするものというかんがえをいだいていたにちがいない。ふりかえれば日常の生きていくのに必要な行為はほとんどこの役にも立たないような単純反復作業がついてまわっているのだった。それを自分でしない人は誰かにそれを変わってもらっているにすぎないのだった。

とりとめもないが、紙数が尽きた。

「校則という束縛から解放されたくて……」。

週刊誌に、ある女優さんが、自分の高校生時代を振り返ってこんな心情を吐露していました。学業、家庭、恋愛、友人関係 etc. 過ぎし日々を思い起こせば、誰もが皆、多かれ少なかれ、迷い、悩んできました。その中には彼女の言う「束縛」という悩みも確かにありました。感受性が強く、好奇心旺盛の若者にとっては、約束ごとやきまりは自分の行動や考えを取締り、規制する「鎖」にしか思えないのはわからないでもありません。昨今目だっている彼らの突飛で、時に粗野な行動は、その鎖を切ろうと、もがき苦しんだ結果の現れであるとも解されます。

若和尚の

其二十八 し な は い い ト ツ ヨ チ

彼らが求めているのは「束縛」に対する「自由」。しかし、ルールを無視して勝手気ままな行動に身を任せるのは、自由ではなく「無秩序」、「わがまま」であり、本来の「自らに由る」ととは、およそかけ離れていかねばならないでしょう。

「どんな子供に育ってほしいですか」なる問いかけに、「人に迷惑をかけない人間に」と答える親が増えていくとか。もっともなようにも思えますが、そんなのは当然であり、ことさらに託すべき願いではないはず。「迷惑をかけないなら何をしてもいいんだ」と裏返されているのが現実です。親のこうした消極性が、今の彼らの考え方や行動を助長している因子になって

はいないでしょうか。もっと積極的な「人としての」他に対する働きかけの必要性を説いていくべきであり、そうした実体験の中にこそ、責任感や思いやり、やさしさといったものが育まれるものと思います。

「自由」とは？ 簡単に答は出ないでしょう。しかし、霧煙る中でそれを模索することを教えるなければ……。決して彼らと対峙するのではなく、私たちと同じ道を通り、迷っている同胞と思つて。もっともそれには、手本となるべき、私たち大人が自らの「背」と、まず真摯に向き合うことが求められています。彼らは、大人の行動を映す鏡でもあるのですから。

(正)

みんな
みんな
手塚治虫
だつた。

●もうひとつの戦後書誌

貸本屋の本棚から

長谷川 裕

ぼくの家は、昭和三十二年から十年ほど、練馬区田柄町、いまの東上線の下赤塚駅近くで、ゆたか書房という貸本屋をいとなんでいた。間口が二軒の、ささやかな店だったけれども、その棚には、二千冊以上のマンガ本が、ぎっしりとそろえられていた。娯楽に乏しかったこの時代、まだテレビも知らなかった小学校一年生のぼくにとって、それは、ものすごいことだった。

当時、マンガは「悪書」ということになっており、そんなものを読む子供は、頭がバカになるというのが世間の常識であった。五、六年まえには、関西を中心にして猛烈な赤本ブームが起き、大人の目から見ても、いかにも粗悪なマンガが猖獗をきわめたから、大人たちはマンガを目の敵にしたのである。ところが、ぼくの両親は、ぼくがマンガを読むことをけっして禁じようとせず、読みたいほうだい読ませてくれた。マンガを読めば、字を覚えるからいいではないかというのが父の考え

だった。きっと、貸本業にプライドを持っていたということもあるのだろうが、いずれにせよ、卓見だったと思う。

そのおかげで、ぼくは、目のまえの宝の山を思うぞんぶん味わうことができた。毎年、春休みや夏休みになると、ひとり電車を乗りついで、下赤塚の店まで行き、一週間ほど泊まりがけで、マンガを読みあさった。昼から暗い四畳半の、六十ワットの電球の下に寝ころがって、ラスクやかりんとうをおやつに、日がな一日、マンガを読みまくった。

なんというぜいたくだろう。ぼくはこんなぜいたくはそれから後にしたことがない。その後、ぼくも大人になって、いろいろな娯楽を知り、つまらない気晴らしをたしなみもしたが、このときの読書体験ほど、ゆたかでのびのびとしたものをほかに知らない。それはきっとこのときの読書が、知性や教養とかいった、せまくなるしく、こわばりきった世俗的価値観から、はるかに遠いところにあった

©永島慎二「田端典子の道中双六」S.30 若木書房刊



からではなからうか。

昭和三十年代前半の貸本マンガは、きわめてバラエティゆたかで、じつにさまざまなマンガ家を擁していた。ゆたか書房の棚のなかには、『のらくろ』の田河水泡や『日の丸旗之助』の中島菊雄といった、戦前からその名を知られた著名マンガ家から、『少年王者』で有名な絵物語作家の山川惣治、当時、すでに少年マンガ界の大御所だった手塚治虫、姉妹で設立した姉妹社から『サザエさん』を出版していた長谷川町子、『竹野しんどう君』や『轟先生』の秋好馨、『モヒカン族の最後』の杉浦茂、永島慎二やつげ義春など、新しい傾向のマンガ作家、さらに、このころ新しく関西から進出しつつあった、松本正彦や辰巳ヨシヒロのミステリー劇画、さらにそれらを取り巻く、きら星のような無名マンガ家たち——と、ありとあらゆるマンガがそろっていた。

当時の貸本屋のマンガが、ゆたかな彩りを持っていたのは、この昭和三十年代という時

代が、日本のマンガが——すなわちその背後にある私たちの社会が——それから大きくそのありようを変えていこうとする過渡期にあったからだろう。

過渡期には、さまざまなものがあらわれ、一瞬、強い光芒を放ったかと思うと、その残像を残して、あっという間に消え去っていく。このころのマンガ家にも、いまとっては名前さえ忘れられてしまったが、忘れがたい輝きを放っていた人々が大勢いる。ぼくは、そうした、いまとっては忘れ去られたマンガ家たちのことを、ここで少し、思い出してみようと思う。彼らの描いたマンガのなかに、あのころのぼくたちをつき動かした夢、もう忘れさってしまった理想、あるいはぼくらの心を、疼くように尽き上げていた衝動が、ひそかに隠されていると思うからである。

*

*

昭和三十年代前半の少女マンガ界に、ほんのわずかなあいだだったが、異彩を放ったマ



©鈴木光明「モモ子探偵長」
りぼん S.34 12月号ふろく



ンガ家がいる。鈴木光明である。この人の代表作、『りぼん』誌上に連載された『もも子探偵長』のことを覚えていたとしたら、それは、四十代半ばから上の女性たちにかぎられよう。男のぼくが彼の名を覚えているのは、ぼくは貸本屋の息子という特典を利用して、当時の少女マンガ月刊誌にも手を伸ばしていたので、その絵が記憶に残っていたのだ。

とはいっても、じつは、彼の名を、それほど強く記憶に残していたわけではない。ぼくは薄情にも、彼のマンガが雑誌から消えてしまふと、すぐに忘れ去ってしまった。

そしてそれから十数年後、たまたま訪れた、中目黒の、つぶれかかった貸本屋で、彼の単行本、若木書房版の『地獄城に起つ』を見つけて出して、そのページを開き、絵を見た瞬間「あつ、これだ、これだった」と電気に撃たれたように、彼のマンガを思い出した。そして、その場で、この本を買いこんだ。

もうひとつは、『りぼん』の付録の『もも子探

偵長』である。これは、ぼくの従兄弟と物々交換で手に入れた。昭和四十年代はじめ、偶然、ある閉店した貸本屋で見つけた、手塚治虫の『地球の悪魔』の単行本と交換したものであるが、この取引、少々、ぼくのほうに不利だったようだ。その後、近所の子供が、ぼくの本棚をいたずらしてこのふろくを見つけて出し、引っ張りだして読んでいるうちに、表紙をビリビリに破いてしまった。ああ、なんて、もったいないことをしてしまったことか。

鈴木光明は「ムードマンガ」なるものを提唱し、マンガのなかで、一種、おどろおどろしい、ミステリーチックなムードを盛り上げることに凝った作家だが、そんなことより、大事なのは、その女性キャラクターのモダンさ、可愛さである。ぼくは鈴木マンガの魅力は、その一点に尽きると思う。

よく、少女マンガのキャラクターは、その星をまたたかせた巨大なる瞳を笑われるのだ

©鈴木光明『地獄城に起つ』S.33 若木書房刊



が、鈴木光明の少女キャラクターは、その文法にのっとった、初期の典型ともいうべきものである。細く、シャープな線を駆使して、まあるいキャラクターを描いたその描法は、今日につながるエロチシズムをも感じさせる。この絵は、それから後の、少女マンガの美少女像が完成するにいたる、ひとつの過程を見せており、そのキャラクターは、いまみても新鮮で、なかなか魅力的である。

わかる人には、よくわかると思うが、この鈴木絵がらは、あきらかに手塚治虫の影響下にある。全身に丸みをおびた四等身のキャラクターも、背景の処理のしかたも、手塚マンガのそれそのものである。実際、鈴木は、その絵の達者さを買われて、若干十八歳で、手塚治虫から、「おもしろブック」のふろく、『丹下左膳・乾雲坤竜の巻』を代筆するよう依頼され、手塚のペンをまったく頼ることなく、永島慎二ともどもこの作品を仕上げている。鈴木光明は、こと絵柄ということについて

いえば、手塚マンガの忠実な再現者でもあったわけだが、それだけに、鈴木オリジンは希薄になりがちであった。だが、だからといって、ここで鈴木を責めるのは酷だろう。このころの若く、貧しい、青年マンガ家たちは誰もが手塚に強くあこがれ、手塚流の丸く、質感の高い描線を会得しようと、必死の努力をしていたのだ。それは、遠藤政治にせよ、永島慎二にせよ、あるいは梅岡かずおにせよ誰にとっても同じことであった。

丹下左膳の代筆で、鈴木とともに筆をふるった永島慎二は、当時若干十七歳、二人とも家は貧しく、中学校を卒業後、職を転々としながら、筆一本で、この世界に飛び込んだ少年たちであった。この時代、若く、貧しいマンガ青年たちの多くは、彼らの想像もおよばない豊饒なる世界をひっさげてやってきた手塚治虫の敷いたレールの上を、胸にあこがれの灯をともしながら、けんめいに追走していたのである。

©遠藤政治「三つの黒曜石」
S.32 若木書房刊



では、そのレールの先にあったものは、はたして何だったのか。それは、あの未曾有の敗戦から、たった十年しか経ていない、貧しく、みじめな日本の現実を忘れさせてくれるモダンで、豊かななにかであった。おそらくそれは、ウォルト・ディズニーのアメリカに象徴されるような、近代的なもの、西欧的なるものへの、ぼんやりとした憧憬だったのではなからうか。その憧憬に火をつけたのが、手塚マンガだったのである。

もちろんそれは、ぼくら日本人の考えた、自分にとってつごうのいいアメリカであり、西欧イメージにすぎなかったのだが、そのぼくぜんとしたイメージこそ、さまざまな意味で、戦後社会のぼくらを、しやにむにつき動かしてきた原動力だった。ぼくは鈴木光明の都会的で魅力的なマンガの描線に、この時代のそうしたぼくらのかなしい、上昇志向のモチベーションを見てとってしまうのである。

鈴木光明は、豊かな画才を持つがゆえに、

絵にエネルギーの多くを注ぎこむタイプのマンガ家のつねとして、ストーリー性がいまひとつ希薄であった。彼のマンガ家としてのピークがそう長く続かなかったのは、そのためだったろうか。昭和四十年以降はほとんどマンガの筆を取ることもなく、集英社系の少女マンガ雑誌で投稿欄を担当し、自ら少女マンガ教室を開講して、後進の指導にあたった。そして、その門下からは数多くの少女マンガ家を輩出させている。

はせがわゆたか

●

1950年東京生れ
早稲田大学政経学部
(漫画研究会)卒業のち
出版社に勤務
10数年の編集者時代に
幾多のベストセラーを生み
その後フリーライターとして
種々のジャンルに活躍している

©梅園かずお「毒蛾館」S.32 三嶋書房刊「鍵・2」より



俳句雑感

大畑 等

人の死に臨んで、深い言葉を持ちたい。「ご愁傷さまです。」では、別れることのできない人の死がある。次兄の死の時、葬列者の前で読まない、自分だけの弔辞を書いたが、どうも納得しなかった。

家にあれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば
椎の葉に盛る 有間皇子

曾我赤兄に謀されて、処刑される旅の途中の歌である。家にあれば銀器に盛る飯を、こういう旅にあれば椎の葉に盛るという意味であるが、有間皇子の境遇から、この歌の意を読みとると、痛切である。どこにも詠嘆的な語が無いが、かえってそれが哀れである。

私は、その頃「やはり形式だなあ、短歌か俳句でもやってみたい。」と漠然とではあるが思っていた。その思いと符合するかのように友人から電話があり、相当俳句に熱を入れているようであった。誘いにつて、三句もつ

て句会に出て行った。高校の授業で作って以来であつたが、意外や難なく作ってしまったようだ。その時の一句は今も覚えている。

向日葵や薔青々ベランダ越ゆ

三点ほど入ったと記憶している。何の変哲もない句ではあるが、手ダレの中にあつて、素直な句であるとの思いから、とつてくれたのであろう。その座に結社の会長が居て、

日曜日蜘蛛の観察から始まる 文雄

が出句された。私は、これも俳句なのだ、と驚きつつ点を入れた。その句会は酒を飲みながら進行する。宗匠が居て自説を滔々と述べる態の句会ではなかった。酒と句会のリラックスした雰囲気誘われて、俳句を続けることとなった。本当は一回きり、ちよつと覗いてこようと思ったただけだったのだが……。

さて、その後は俳句形式と言葉との格闘の日々が続く。さらつと自然に句ができる時もあれば、言葉がざらついて、摩擦感があり苦悶する時もある。後者の場合、自分の生理的な感覚から離れて、思いも寄らなかつた世界へ展けて行くことがある。

牡蠣かきひそむ軍港父ら母ら追われ

最初は「軍港」が「胃」の中に納められていくという、身体性の不思議を俳句で詠もうとしていたのだが、観念的になり過ぎたり、リズムが整わなかつたりで、句会への電車の中でこねくり廻していた。時間切れで、とっさに短冊に書いて出句したのではあるが、私の父母が追われたわけではなかつたのと、リズムを整えるために「父ら母ら」と複数にした。全く最初のイメージとは異なつた句ができたのではあるが、言葉をジャンプさせたのは俳句の形式によるものと私は今も思っている。

その句は「砂の会」という江東区で催されている句会に出した。一週間後、主催者の須田桜児さんから「秀逸です」との感想の葉書を頂いた。その桜児さんが三月に亡くなり、追悼句会を催した。この日も句ができなくて電車の中で、言葉をこねくり廻していた。もう桜児さんの追悼句会であることなど忘れていたのだが、出した句は

大正の肺の暗さの弥生なり

であった。桜児さんは昭和一けた生まれではあったが、肺癌で亡くなったのだ。この句も最初は、自分の肺の呼吸と外界との齟齬そごを詠もうと思っていたのだが、計らずも桜児さんの追悼句となってしまうていた。どうやら俳句の形式は無意識をつき動かす大いなる力をもっているようだ。

四十歳になろうとした頃からか、父のことが気になってきた。父は私が十八歳の時に亡

くなったのではあるが、自分の息子達が思春期に入る頃、やはり自身の父性を自覚せざるを得ないからだろうか。戦後生まれの私にとつて、戦後の父しか知らないのではあるが、実に父は静かに生を送っていたように思われてならない。戦争の話、軍隊の話などは全くなかった。父の友人が、その話題をもちかけても、話にのついていかなかったように思える。父の性格から推し測って、軍隊のような組織は毛嫌いしたのかもしれない。終戦直後の一年間は土蔵に入って本ばかり読み、外に出て来なかったと母から聞かされたが、父には旨く立ち廻ろうという考えは無かったように思われる。

橋渡る父の戦後や白木槿

父ありき軍歌唄わず玩具売る

父は二、三商売を替えて、おもちゃ屋に落ち付いた。

知夏

FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

晩夏

誌上俳壇

護られて生きる命か蟬時雨

児玉良男（三島市）

寺の子の三代目なる夏行かな

西南の役の碑仏桑花

吉田ゆきゑ（江戸川区）

夏休み父を相手の詰将棋

迷ひ入る夏蝶己が影打てり

疎開地の湯けむりいまも盆の月

内堀綾子（小金井市）

父の忌は蟬しぐれして五十年

残り咲く泰山木を庭に見る

山田瑞邦（神戸市）

花好きの先師が植えし花みずき

晩夏

それぞれに昼寝場所あり放ち鶏

縄文字の火文字に変わる虫送

水蓮のまとふは弥陀の光かな

父の日の父の照れをり赤きシャツ

丹精の夫に応へて沙羅咲きぬ

松本厚子（町田市）

長谷川光雅（白井町）

歳月を透明にして百合ひらく
品評会二等の稲と父は亡し

齊田 仁（多摩市）

父の日に刷りのずれたる箸袋
怯えいる水羊羹のゴムを切る

古井戸白々（中野区）

蓮の花ぽんと音たて咲くすがた
おとがひの青き写楽の団扇かな

児玉仁良（入間市）

事務局便り

●J・FORUM（浄土フォーラム）

ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー（J・FORUM）。毎月、投句、投稿を頂いておりますが、編集部ではもつともつとたくさんの作品を、お待ちしております。短歌や俳句、書評随筆や詩、身近な出来事や情報など、先の要領でどんどんご応募ください。私たち編集部では、読者の皆さんと一緒に、この「浄土」をより楽しく、すばらしいものにしていきたいと考えております。

1 随筆・歌など…四百字詰め原稿用紙十枚以内

2 俳句・短歌・川柳など…四首まで

3 その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりと気軽にお聞かせ下さい。

……適宜

タイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却いたしませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈いたします。

●読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。

1 九月号でもつともよかった記事。

2 今後、掲載してもらいたい記事、希望する内容。

3 法然上人鑽仰会の活動として望むこと。

4 その他。ご意見、ご感想など。官製はがきまたはFAXで事務局までお送り下さい。もれなく記念品を差し上げます。どうぞご協力お願いします。（住所、氏名、電話番号をお忘れなく）

●新規会員紹介（敬称略、順不同）

購読会員

福岡	東筑組	長専寺
東京	城西組	法蔵寺
東京	保谷市	浄心寺
埼玉	新座市	松井タミ子
東京	目黒区	足田秀郷

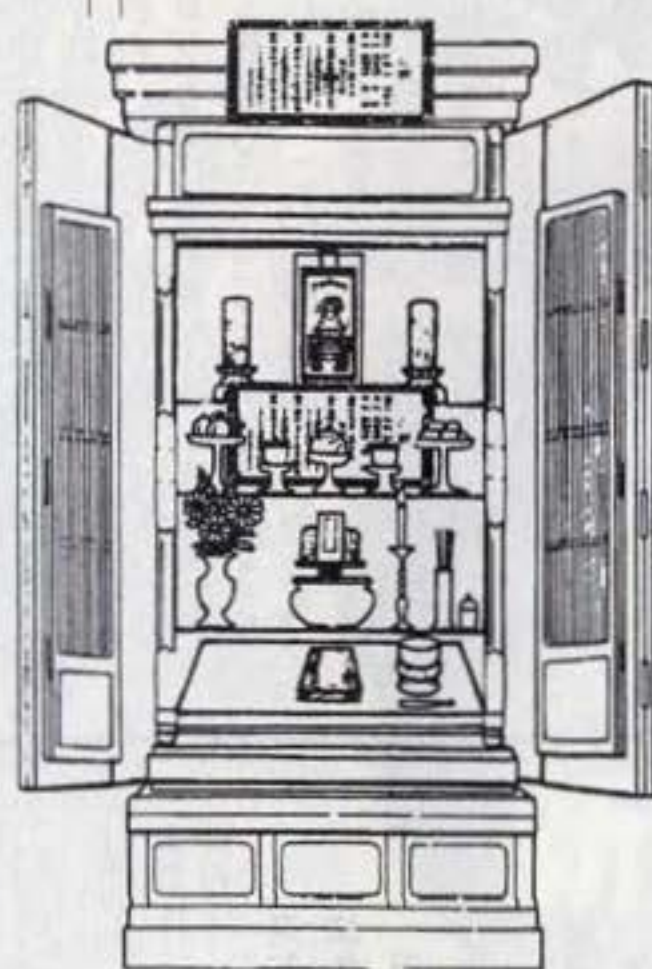
好評
発売中!!

お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。
菩提寺とその宗旨がいつも
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。



定価：大（32.0×18.3cm）721円／小（27.3×14.2cm）412円

注文・問合せは

法然上人鑽仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036



昭和
中表紙

子供らもこうべをたれる残暑かな

岱潤

「実るほどこうべをたれる稲穂かな」の名句を
思い浮かべた方も多いと思うが、歳時記の説明で
立秋後の暑さをさし、この暑さは稲の生育には欠
かせないという添え書きがあったので、思わずこ
んな句を詠んでしまった。

神戸連続殺傷事件の報道で、少年法の問題がク
ローズアップされ、少年院の映像がテレビに映っ
たとき、思わずうなつてしまった。更生施設であ
る少年院の生活、教育とはこういうものののだろ
うか。だいたい想像はついていたものの、こうし
た犯罪が起こり、少年の更生が問題になってくる
と、我々も真剣に考えなければならぬ。

犯罪を犯した少年に、罪の自覚と反省を促し、
人間としての価値観、倫理観を築き、社会性を育
てることが少年院の更生教育であろうと私は思う
のだが、現在の少年院の生活とは、特別なケース
を除き全員一律の教育に見受けられた。多忙すぎ
るほどの一日のプログラムによる生活が課せられ、
身体を動かすことと規律を守ることが重要視され
ているように思われた。これで個人個人の少年達
の更生教育ができるのだろうか。

退院後の再犯率四十数%という数字が少ないの
か多いのか、判断は譲るとして、現行の一律的な
指導教育だけではなく、それぞれの少年達が、自
分自身で考えることができるような教育が求めら
れるべきであると思う。

いつまでも続く暑さには、子供でさえうなだれ
る。稲さえも水と光の両方を求めている。厳しさ
だけが教育ではない、まして更生少年には。(長)

編集チーフ

編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

石上俊教

佐山哲郎

編集顧問

大室了皓

浄土

六十四巻九月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成九年八月二十五日

発行 平成九年九月一日

発行人 真野龍海

編集人 宮林昭彦

印刷所 株式会社 シーテイエー

〒一〇五 東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

1997年 黒ラベル宣言 発売20周年

もっと、ピヤホールで生へ。



新登場

BLACK LABEL IS
AS CLEAN & FRESH
FRESH TASTE

生

熟処理していません

CERAMIC FILTERING
TO BRING YOU THE
IN EVERY GLASS

ピヤホールで喉ごし

サッポロ<生>黒ラベル

さらにおいしくなって新登場



ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ



●ご協力をお願いいたします。自動販売機による酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。
サッポロビール株式会社

Cima, Cima.

monthly JODO 1997.9 発行人／真野龍海 編集人／宮林昭彦 編集チーフ／長谷川岱潤



ここにニッサンの最高があります。新しいシーマ

シーマがあることで、あなたの生活にどんな感動と満足が生まれるだろうか。私たちは今、大きな自信を持って話せます。技術を注ぎ、性能に妥協せず、あらゆる状況で、「これぞシーマ」の乗り心地を楽しんでいただけると。あなたがクルマに理想として求めてきたことが、こんどのシーマに実現できたと。すみずみまで「ニッサンの最高」にふさわしい仕上り。風格と躍動感。ひとたび走り始めれば、そこにはもっと深い歓びが待っています。シーマ！シーマ！あなたの熱い賞賛の声が聴こえそうです。日本車初。全車、SRSサイドエアバッグ標準装備。運転席・助手席に装着。側面衝突時の胸部に加わる衝撃を緩和します。大きく進化した4.1ℓ V8エンジン搭載。シーマのために開発。優越感あふれるスペックが、滑らかで力強い加速を生みます。



Photo:シーマ41LV ボディカラーダークブルーイッシュブラックフォートーン(P) (#4S9・特別塗装色)本革シートはメーカーオプション ●全長4970×全幅1820×全高1445(mm) ●エンジンV8 4130cc TWINCAM ●最高出力270ps/5600rpm(ネット値) ●最大トルク38.4kgm/4000rpm ●運転席・助手席SRSサイドエアバッグ ●デュアルエアバッグ(運転席・助手席SRSエアバッグ) ●ABS(アンチロックブレーキシステム) ●V-TCS ●AVシステム(TV機対応) ●運転席オートドライビングポジションシート ※一部車種に搭載。シーマのお求めは、お近くのローレル・スカイライン各販売会社へ。

スピードおさえて、いい運転。
シートベルトをしめましょう。

LIFE TOGETHER
 NISSAN

人間のやさしさをクルマに。